

# 李舟撰『能大師傳』の内容とその歴史的意義

伊吹 敦\*

## はじめに

李舟（740-787）撰の『能大師傳』は早くに失われ、現在は、姚寬（1105-1162）の『西溪叢語』中にその内容についてのわずかな言及を見うるに止まっている。この言及については、駒澤大學禪宗史研究會編著『慧能研究—慧能の傳記と資料に関する基礎的研究』<sup>1</sup>で夙に指摘されているものの、『能大師傳』そのものについてはほとんど論じられていない<sup>2</sup>。しかし、そのわずかな言及によっても、本書の説く「慧能傳」の内容や性格を窺うことができ、それによって、本書の「慧能傳」が、先行する敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』に基づきつつ、その兩者を綜合する形で成立し、また、後世に多大な影響を與えたことを知ることができるのである。

敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』は、いずれも八世紀の後半に荷澤宗内部で相次いで作られたものと見られるが<sup>3</sup>、兩書で提示された「慧能傳」の間には多くの相違や矛盾が認められ、荷澤宗の枠を超えて、慧能の兒孫をもって任ずるもの全てにとって、「六祖」としての普遍的な慧能傳を作ることが、喫緊の課題となっていた。そうした中で現れたのが李舟の『能大師傳』であったと考えることができるのである。

本拙稿では、それがいかなる内容のものであったのか、いかなる資料に基づいて編輯されたものであったのか、李舟がそれを編輯した経緯はいかなるものであり、また、その影響はどうであったのか等の諸問題について可能な限り明らかにしてゆきたい。

---

\*東洋大学文学部教授・「国際禪研究プロジェクト」研究代表者

## 一 李舟撰『能大師傳』への『西溪叢語』の言及

以下の議論の前提として、先ず、『西溪叢語』卷上に言及される『能大師傳』について、その文章を提示するとともに、その内容と性格について確認しておきたい。先ず、その文章を掲げると、

「唐李舟作能大師傳。a五祖宏忍告之曰。汝緣在南方。宜往教授。持此袈裟以爲法信。一夕南逝。b忍公自此言說稍稀。時謂人曰。吾道南矣。時人未之悟。c壬申公滅度後。諸弟子求衣不獲。始相謂曰。此非盧行者所得耶。使人追之。已去。d及大師歸至曹溪。追者未至。遂隱於四會懷集之間。不言雞足峯前提不起事。」<sup>4</sup>

というものであり、そこに、

- a. 弘忍は、慧能に付法を行い、達摩の袈裟を傳法の證として授け、夜、竊かに南方に去らせた。
- b. その後、弘忍は、ほとんど何も語らなくなり、自分の教えは南方へと去ったと述べたが、その意味を理解する弟子はいなかった。
- c. 壬申の年、すなわち咸亨三年（672）に弘忍が入滅した後、代々伝えられてきた達摩の袈裟が見つからなかったため、慧能の傳法に氣づいた。
- d. 曹溪に歸って四會・懷集の縣境に隠れる前、大庾嶺で慧明（あるいは道明）が追いつく場面では、慧明が傳法の證としての袈裟を持ち上げようとしても持ち上げられなかったとする記述は存在しなかった。

といった記述が含まれていたことが知られる。

ここで注意を要するのは、姚寬の敘述が正確な引用ではないということである。そのことは末尾の「雞足峯前提不起事」によって明らかである。これは明らかに「大庾嶺前提不起事」の誤りであるが、こうした誤りが生

じた原因は、『圓悟佛果禪師語錄』に「迦葉携坐雞足峯 老盧持過大庾嶺」<sup>5</sup>とあるように、宋代には、迦葉が雞足峰で釋迦の衣鉢を携えて彌勒の出現を待つことと、慧能が達摩の衣鉢を携えて大庾嶺を超えようとしたことをセットのように取り上げることがしばしば行われていたため、「大庾嶺」と書くべきを、誤って「雞足山」と書いてしまったためと推測されるのである。恐らく、この記述は、姚寬が李舟の『能大師傳』を読んだ後、自分が知っていた「慧能傳」と最も異なる特徴的な點を、慧能への傳法と南歸の場面に見出し、その特徴を纏めたものなのである。

この一連の敘述で重要なのは、慧能への傳法と弘忍の入滅が極めて短期間に起こった事件であったとされていたということである。弘忍の入滅後に袈裟がないことに気づいた後、弟子たちが慧能を追いかけて、大庾嶺で慧明が他に先驅けて慧能に追いついたのであれば、弘忍の入滅は慧能への傳法の直後でなくてはならないはずである。更に、その弘忍の入滅を咸亨三年壬申の歳とするのも特異な説であり、これらの點が姚寬の關心を引いたため、特に書き記されたと考えられるのである。

では、彼が基準とした一般的な「慧能傳」とは何かと言えば、先ずは、景德元年（1004）に入藏の榮譽に浴し、廣く流布した道原の『景德傳燈錄』（以下、『傳燈錄』）の「慧能傳」の存在を考えるべきであろう。そこで、『傳燈錄』の該当する箇所を掲げると次のようになっている。

- a. 「逮夜乃潛令人自碓坊召能行者入室。告曰。諸佛出世爲一大事故。隨機小大而引導之。遂有十地三乘頓漸等旨。以爲教門。然以無上微妙祕密圓明眞實正法眼藏。付于上首大迦葉尊者。展轉傳授二十八世。至達磨居于此土。得可大師。承襲以至于吾。今以法寶及所傳袈裟用付於汝。善自保護無令斷絕。……能居士跪受衣法。啓曰。法則既授衣付何人。師曰。昔達磨初至。人未知信。故傳衣以明得法。今信心已熟。衣乃爭端。止於汝身。不復傳也。……能禮足已捧衣而出。是夜南邁大衆莫知。」<sup>6</sup>
- b. 「忍大師自此不復上堂凡三日。大衆疑怪致問。祖曰。吾道行矣。何更詢

之。」<sup>7</sup>

- c. 「復問。衣法誰得耶。師曰。能者得。於是衆議盧行者名能。尋訪既失。懸知彼得。即共奔逐。」<sup>8</sup>

「忍大師既付衣法。復經四載。至上元二年乙亥歲。乃唐高宗時也。至肅宗時。復有上元年號。其二年歲在辛丑也。忽告衆曰。吾今事畢。時可行矣。即入室安坐而逝。壽七十有四。」（上元二年は、675年に當たる）<sup>9</sup>

- d. 「師（道明）最先見。餘輩未及。盧行者見師奔至。即擲衣鉢於盤石曰。此衣表信。可力爭耶。任君將去。師遂舉之。如山不動。」<sup>10</sup>

a については、「慧能傳」の通説であるから、基本的に同じと見てよい。また、b についても、さしたる相違は認められないが、c と d については、李舟撰『能大師傳』と全く異なっていることが知られるのである。

上に論じたように、姚寬が『能大師傳』の最も特徴的な相違箇所を取り上げ、その内容を取意によって紹介したのが上に引いた文章であったというのであれば、李舟の『能大師傳』の文章が『西溪叢語』の言及そのままであったと考えることはできないし、他の「慧能傳」との相違がこの場面のみにあったと考えることもできないこととなろう。しかし、この敘述に見られる『傳燈錄』との相違が最も特徴的なものであるというのであれば、見方を換えて言えば、『傳燈錄』に見える、柴を賣っていた時に『金剛經』を讀誦しているのを聞いて弘忍に弟子入りしたという話や、神秀との呈偈の應酬による傳法、儀鳳元年の印宗による出家と受戒、中宗による敕召、弘忍や慧能による傳法偈の傳授、歿後の傳衣の獻納と返却等の重要な事項の多くは、李舟の『能大師傳』にもあったと見なして差し支えないこととなろう。

## 二 敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』の綜合としての『能大師傳』

上に見たように、李舟の『能大師傳』の内容の多くは『傳燈錄』と重なっていたものの、その一部に違いがあったわけであるが、その相違点として、姚寛が最も重要なものと見做したのが、

- I. 慧能への傳法の直後に弘忍が入滅したとする。
- II. 弘忍の入滅を壬申の年、すなわち咸亨三年（672）とする。
- III. 慧明（道明）が大庾嶺で慧能に追いつく場面で、慧明が達摩の袈裟を持ち上げようとしたが持ち上げられなかったとする記載がない。

という3点であった。このうち、IIIの袈裟を持ち上げられなかったという記載は、後の一覽表に據って推測されるように、後世の『寶林傳』による加上と見られるので、これを除き、他の2点について、そのような特異な説が生じた理由を考えると、それがいずれも『曹溪大師傳』（781年）の説を前提としたものであったことが窺われるのである。

先ず、Iについてであるが、これは印順（1906-2005）のいわゆる「臨終密授説」であって<sup>11</sup>、東山法門の指導者の地位が弘忍から慧能へと移譲されたことを最も明確な形で示すために考え出されたものであるが、これに最も近い説は、慧能への傳法の三日後に弘忍が亡くなったとする、『曹溪大師傳』の次の記載である。

「忍曰。後有邪法競興。親附國王大臣。蔽我正法。汝可好去。能遂禮辭南行。忍大師相送已。却還東山。更無言說。諸門人驚怪問。和上何故不言。大師告衆曰。衆人散去。此間無佛法。佛法已向南去也。我今不說。於後自知。忍大師別能大師。經停三日。重告門人曰。大法已行。吾當逝矣。忍大師遷化。」<sup>12</sup>

『能大師傳』は『曹溪大師傳』のこの説を承け継いだものと考えられるが、姚寛の記述を信ずれば、弘忍の歿後に傳衣が見当たらないことによって弟子たちは初めて慧能の得法に気づいたという内容であったようであり、そこには新たな作爲が加えられていたことが窺われる。

Ⅱの弘忍の入滅を壬申の年、すなわち咸亨三年（672）とする説も、『曹溪大師傳』の影響を明瞭に示すものである。というのは、これは『曹溪大師傳』に見られた年代論的な矛盾を訂正しようとしたものだと考えられるからである。その訂正に当たっては非常に複雑な操作が行われたと見られるので、以下、順を追ってその経緯を説明しよう。

『曹溪大師傳』の年代論には種々の矛盾があるが、それが生じた理由を解明しようとしたのが、拙稿「『曹溪大師傳』の成立をめぐる」である<sup>13</sup>。それによると、『曹溪大師傳』の作者は、先ず、「慧能の年齢」という相対年代を中心に傳記を組み立て、

年齢	事蹟
1 歳	誕生
3 歳	両親を失い孤児となる
30歳	曹溪に來て劉志略と知己となる
31-33歳	無盡藏尼との因縁により寶林寺で3年間修行する
34歳初-35歳初	寶林寺から弘忍に參じ、8箇月後に得法して南歸する
35歳初-39歳末	四會・懷集の県境で5年間、獵師とともに隱遁する
40歳初	印宗により出家・受戒・開法の後、曹溪に歸る
40-76歳	36年間にわたって人々を濟度する
76歳	入滅

という傳記を構想したが、それに絶対年代を示す干支を充てるに際して、歿年の干支が正しくは「癸丑」であるのを「壬子」と誤ったため、次のように實際より一年前にスライドした年代論になってしまった。

西暦	年齢	事蹟
637	1 歳	誕生
639	3 歳	両親を失い孤児となる
666	30歳	曹溪に來て劉志略と知己となる
667-669	31-33歳	無盡藏尼との因縁により寶林寺で3年間修行する
670初-671初	34-35歳	寶林寺から弘忍に參じ、8箇月後に得法して南歸する
671初-675末	35-39歳	四會・懷集で5年間、獵師とともに隱遁する
676初	40歳	印宗により出家・受戒・開法の後、曹溪に歸る
676-712	40-76歳	36年間にわたって人々を濟度する
712	76歳	入滅

更に、『曹溪大師傳』では、これに加えて、この年代論とは矛盾する、咸亨五年（674）に弘忍に參問した等の絶対年代に基づく事跡を書き込んだため、多くの混亂が生じたのである<sup>14</sup>。

「南宗の祖」たる慧能の傳記に多くの矛盾と混亂が含まれていることは、慧能を祖と奉じる人々にとって大きな問題であり、それを補正することは喫緊の課題であったはずである。そこで、この年代論の補正が図られることとなった。そのためには、先ず、その傳記の全體を一年後にスライドさせる必要があったが、それだけでは事は片づかなかった。というのは、慧能が印宗に見出され出家したのは、先行する『瘞髮塔記』に「儀鳳元年歲次丙子」と年と干支が明記されているために、儀鳳元年（676）からスライドさせることができなかったのである。そこで、南方での隱遁期間を5年から4年に縮めざるをえなかった。そうすると、

西暦	年齢	事蹟
638	1 歳	誕生

640	3 歳	兩親を失い孤兒となる
667	30歳	曹溪に來て劉志略と知己となる
668-670	31-33歳	無盡藏尼との因縁により寶林寺で3年間修行する
671初-672初	34-35歳	寶林寺から弘忍に參じて8箇月後に得法して南歸する
672初-675末	35-38歳	四會・懷集で4年間、獵師とともに隱遁する
676初	39歳	印宗により出家・受戒・開法の後、曹溪に歸る
676-713	39-76歳	37年間にわたって人々を濟度する
713	76歳	入滅

となるが、これでもまだ問題があった。というのは、『曹溪大師傳』では、弘忍のもとで慧能が得法した直後に弘忍が入滅したことになっているため、この年代論に従うと、神會系で伝えられていた弘忍の入滅年代、上元二年（675）と齟齬を来してしまうのである。そこで、この矛盾を解消するために考え出されたのが、弘忍の入滅の時期をこの年代論に沿って移動させることであった。すなわち、儀鳳元年（676）の出家が動かせないのであれば、そこから隱遁期間の4年を減じて、咸亨三年（672）を慧能の得法と南歸、弘忍の入滅の歳と定めたのである。かくして、『曹溪大師傳』の年代論は、

西暦	年齢	事蹟
638	1 歳	誕生
640	3 歳	兩親を失い孤兒となる
667	30歳	曹溪に來て劉志略と知己となる
668-670	31-33歳	無盡藏尼との因縁により寶林寺で3年間修行する
671初-672初	34-35歳	寶林寺から弘忍に參じて8箇月後に得法して南



		歸するその直後に弘忍が入滅する
672初-675末	35-38歳	四會・懷集で4年間、獵師とともに隱遁する
676初	39歳	印宗により出家・受戒・開法の後、曹溪に歸る
676-713	39-76歳	37年間にわたって人々を濟度する
713	76歳	入滅

と補正され、弘忍の入滅を咸亨三年（672）壬申の年とする新説が出現することとなる。私見によれば、上に述べてきたことこそが李舟が『能大師傳』において、『曹溪大師傳』に見られた種々の矛盾を解消した方法であったと考えられるのである。

もっとも、上記の3歳から33歳に至る事蹟は、『曹溪大師傳』の特殊な説であって、もし李舟がこれをそのまま採用していれば、姚寛が『西溪叢語』で言及しなかったはずがないので、恐らくは、この部分は、『傳燈錄』に見られるような、『曹溪大師傳』と敦煌本『六祖壇經』とを折衷する内容に置き換えられていたであろう。つまり、敦煌本『六祖壇經』に由來する、早くに父を失い、薪を賣って母を養ったとする記述、客が『金剛經』を唱えるのを聞いて母を辭して弘忍に參ぜんとしたとする記述が加えられ、その後に『曹溪大師傳』に由來する、韶州で劉志略と無盡藏尼と交流を持ち、寶林寺に住したとする記述、樂昌縣で智遠に教えを請い、弘忍に參ずることを勧められたとする記述があったと考えられるのである。

『曹溪大師傳』は、父を失った時の年齢を3歳、劉志略と交流を持った時の年齢を30歳、寶林寺に住した期間の年齢を31歳から33歳まで、弘忍に參じた時の年齢を34歳とする。恐らく、『能大師傳』はこれらの事跡をそのまま採用していたであろうが、ただ、その時の年齢を明記していたかどうか疑わしい。というのは、『祖堂集』と『傳燈錄』は、弘忍に參問した時の慧能の年齢を32歳とするが、この説は、後に論ずるように、敦煌本『六祖壇經』の記載に基づいて『寶林傳』が創唱したものを承けたものと考えられるが、『能大師傳』に直接據った『寶林傳』がこうした説を採用した

こと自體、これらの事跡に關して『能大師傳』にその時の年齢が明記されていなかったことに據ると考え得るからである。ただ、可能性としては、『能大師傳』に『曹溪大師傳』と同じ年齢が書かれていたのを、『寶林傳』が獨自の見地から改めたということもあり得るので、斷定はできない。

一方、印宗に見出されて出世した後の記述については、『曹溪大師傳』においても全て年號によって提示されており、それをそのまま採用していたと考えられる（但し、慧能を宮中に招こうとした皇帝を『曹溪大師傳』が高宗（649-683在位）とするのは完全な矛盾であるから、『傳燈錄』等と同様、中宗（684、705-710在位）に改められていたであろう。また、慧能が弟子に龕塔を造らせた時期を敦煌本『六祖壇經』が先天元年（712）とするのに對して、『曹溪大師傳』は景雲二年（711）とし一致しないが、後に示す一覽表から推測されるように、『能大師傳』では前者を採用していたようである）。

つまり、李舟の『能大師傳』の年代論は、各事蹟の際の年齢は明示されていなかったにしろ、おおよそ以下のようなものであったと推測されるのであって、そこには矛盾は一切存在しなかったのである。

西曆	中國曆	年齢	事蹟
638	貞觀十二	1 歳	誕生
640	貞觀十四	3 歳	父を失う
?		?	薪を賣って母を養う
?		?	客が唱える『金剛經』を聞き、弘忍に參ぜんとす
667	乾封二?	30歳?	韶州で劉志略・無盡藏尼と交流を持つ
668-670	乾封三-總章三	31-33歳	三年間、寶林寺に住し、その後、樂昌縣で智遠

			に弘忍への参問を勧められる
671初-672初	咸亨二-三年	34-35歳	弘忍に参じ、碓坊で労働に従事する 8箇月後に呈偈の結果、得法して南歸する その直後に弘忍が入滅する
672初-675末	咸亨四-上元二	35-38歳	四會・懷集で4年間、獵師とともに隠遁する
676初	儀鳳元	39歳	印宗により出家・受戒・開法の後、曹溪に歸る
676-713	儀鳳元-先天二	39-76歳	37年間にわたって人々を濟度する
677	儀鳳二	40歳	曹溪に歸る
705	神龍元	68歳	中宗から入内を求められるも拒絶する
707	神龍三	70歳	法泉寺の敕額が下賜され、國恩寺が敕建される
712	景龍三	75歳	弟子に命じて自らの龕塔を造らせる
713	先天二76歳	入滅	

上に見てきたことから窺われるように、李舟が『能大師傳』で行おうとしたのは、先行する『曹溪大師傳』と敦煌本『六祖壇經』をベースとしつつ、その内容を綜合することであったと考えられる。その際に李舟が行ったのは、先ず、『曹溪大師傳』の年代論上の矛盾と混亂を解消し、その後に、それに含まれていない内容を敦煌本『六祖壇經』から取り込むことであっ

たと考えられるのである。

ここで注目されるのは、荷澤神會の著作、『師資血脈傳』に基づいて書かれた『歷代法寶記』の「弘忍章」に、

「後至上元二年二月十一日。奄然坐化。忍大師時年七十四。」<sup>15</sup>

と述べるように、弘忍の歿年を上元二年（675）とするのは荷澤宗では古くからの定説であったにも関わらず、それを無視して、慧能の師、弘忍の入滅は慧能の得法・南歸の直後でなくてはならないという考えに沿って、全くの獨斷によって咸亨三年（672）壬申の年に定めるといった不遜なことを敢えて行ったということである。これは、李舟において「臨終密授説」による慧能の正統化や權威づけがいかに重要であったかを示すものと言える。

李舟（740-787）による『能大師傳』の編輯は、およそ上記のごときものであり、そのためには多くの勞力を費やしたことが推察されるが、それでは、どうして李舟は、わざわざこのような著作を書くことになったのであろうか。李舟の傳記と關聯づけながら、これらの問題について考えてみたい。

### 三 『能大師傳』編纂の意圖

『能大師傳』の編者、李舟は『切韻』の撰者として名高い人物であるため、古くから、その傳記が研究されてきた。いくつかの研究成果がある中で、ここでは比較的新しい陳冠明氏の「李舟行年考」<sup>16</sup>によって、その概要を示すと以下のごとくである。

・隴西の成紀（甘肅省）の人で、天寶十四載（755）、16歳で黃老學で科舉に應じて及第し、乾元元年（758）、19歳で弘文館校書郎を授けられた。

- ・寶應元年（762）には23歳で金吾衛大將軍掾となり、廣徳二年（764）には25歳で湖南觀察使孟暉從事、兼觀察御史となった。
- ・その後、地方官を歴任した後、大暦十四年（779）、40歳の時、楊炎（727-781）が宰相となり、李舟を取り立てたため、建中元年（780）に金部員外郎となり、宣慰使として赴いた涇州で叛亂軍の捕虜となったが運良く事なきを得た。
- ・建中二年（781）の二月には、「山南湖南宣撫使」として梁嵩義（生歿年未詳）の叛亂への宣慰と稱して、劉晏（716-780）の處刑や兩税法の施行によって苦境に立った楊炎のために地方の節度使の懷柔に努めた。
- ・同年五月には吏部員外郎となったが、楊炎が死を賜った後、讒言によって左遷され、その後、峽州（湖北省）の刺史となり、更に建中四年（783）頃、虔州（江西省）の刺史となった。
- ・興元元年（784）に任を解かれたので、檢校兵部尚書で劍南西川節度使の張延賞（726-787）に逢うために四川に赴いたが、結局、官途が開けなかったため、饒州（江西省）で隱退生活に入り、貞元三年（787）に病氣で亡くなった
- ・『切韻』の外にも『笛記』などの著作があったとされるが、現存しない。

李舟は熱心な佛教徒であり、後に見るように馬祖の弟子、西堂智藏（738-817）の在家の弟子であった。そうしたこともあって、詩に「身許雙峰寺。門求七祖禪」と歌った杜甫（712-770）、宏正（普寂の弟子、生歿年未詳）の依頼によって「舒州山谷寺覺寂塔隋故鏡智禪師碑銘并序」を撰述した獨孤及（725-777）、荷澤神會の弟子、慧堅（719-792）の支持者であった張延賞らの禪宗の篤信家や、天台宗の荊溪湛然（711-782）に學んだ梁肅（752-793）らとの交流が知られている（李舟の祭文を書いたのは外ならぬ梁肅であった）。

李舟の『能大師傳』が基づいた敦煌本『六祖壇經』は、拙稿『『六祖壇經』の成立に關する新見解—敦煌本『六祖壇經』に見る三階教の影響とその意

味」<sup>17</sup>によって明らかにされたように、大暦五年（770年）前後に中原（長安と考えられる）で活躍していた慧堅らの荷澤宗の人々によって作られたと考えられ、また、『曹溪大師傳』は、その本文中に、

「先天二年壬子歲減度。至唐建中二年。計當七十一年。」<sup>18</sup>

とあることから、建中二年（781）の成立と考えられるが、これを編輯したのも、慧堅を中心とする中原の荷澤宗の人々であったようである<sup>19</sup>。この建中二年は李舟を取り立ててくれた楊炎が死を賜った正にその年に当たり、以後、李舟は不安定な立場に置かれたようである。上記の「李舟行年考」によれば、この年、李舟は42歳で、金部員外郎、吏部員外郎等の職にあって、中原にいたと考えられ、成立間もない敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』の兩者を入手しうる環境にあった。

その後、李舟は虔州の刺史となったわけであるが、当時、虔州では西堂智藏が教線を伸ばしており、再建された智藏の塔銘、唐技（生歿年未詳）撰『龔公山西堂敕賜大覺禪師重建大寶光塔碑銘』（9世紀半ば）には、馬祖が亡くなった後、その教化を受け繼ぐような活躍をしたとし、その頃、李舟が智藏に師事したとして、次のように述べている（これについては、先の「李舟行年考」には言及するところがない）。

「大寂將欲示化。自鍾陵結茅龔公山。於門人中。益爲重。大寂歿。師教聚其清信衆。如寂之存。是時太守李公舟。天下之名人也。事師精誠。如事孔顔。」<sup>20</sup>

もっとも、李舟の歿年は馬祖道一（709-788）のそれよりも早く、これは事実とは言えないが、少なくとも智藏の在家の弟子であったとする傳承が後世まで伝わっていたことを示すもので、李舟が智藏の重要な檀越の一人であったことは史實と認めてよいであろう。

上記の「李舟行年考」によると、興元元年（784）以降、李舟は官を辞し、饒州（現在の江西省上饒市）の餘干と洪州（現在の江西省南昌市）の龍沙が接する邊りに土地を購入し、「與道爲徒。以農代祿」（梁肅撰『祭李虔州文』の言葉）という生活を送ったという。この地域は、西堂智藏の住した虔州（江西省贛州市）からそれほど離れてはおらず、また、水路で結ばれていたようであるから、恐らく、ここに永住の地を定めたのは、智藏に師事することが一つの目的であったであろう。

上の塔銘に見るように、智藏は馬祖の一番弟子として、洪州宗を指導する立場にあった。神會の弟子、靈坦（709-816）の碑銘、賈餗（?-835）撰『揚州華林寺大悲禪師碑銘并序』（825年）に、

「大迦葉親承心印。二十九世傳菩提達磨始來中土。代襲爲祖派別爲宗。故第六祖曹溪惠能始與荊州神秀分南北之號。曹溪既沒。其嗣法者。神會懷讓又析爲二宗。」<sup>21</sup>

と言い、荷澤宗の後繼者をもって自ら任じた圭峯宗密（780-841）が『裴休拾遺問』において、

「五。洪州宗者。其先則六祖下傍出。謂有禪師名道一。先是劍南金和尚弟子。金之宗源則智儼也。亦非南南北。高節至道。遊方頭陀。隨處坐禪。乃至南嶽。遇讓禪師。論量宗教。理不及讓。方知傳衣付法。曹溪爲嫡。乃迴心道稟。便住處州洪州。」<sup>22</sup>

と述べるように、9世紀の初めには荷澤宗の人々も、

六祖慧能 —— 南嶽懷讓 —— 馬祖道一

という洪州宗の系譜を認めていたのであるから、8世紀末には、馬祖の弟子たちの間で、この系譜は既に史實と認められていたはずである。しかし

ながら、南嶽懷讓が六祖慧能の弟子であったことを裏づける古い文献資料は何も存在しなかった。それまでの六祖慧能の傳記は全て荷澤宗によって書かれ、弟子の中で荷澤神會のみを特権化しようとするものばかりであったからである。こうした中、馬祖の後継者となった智藏は、それとは異なる洪州宗の「慧能傳」を必要としていたはずである。そこで、文化人として名高かった李舟に新たな「慧能傳」の撰述を依頼した可能性が考えられるのである。

李舟が智藏に師事したのが虔州の刺史となった後のことであれば、その成立は、建中四年（783）以降、その歿年である貞元三年（787）までの間ということになる。そして、上の推定が確かであれば、『能大師傳』には、荷澤神會を慧能の後継者とする記述に代えて、何らかの形で六祖慧能—南嶽懷讓—馬祖道一という系譜を正當化する記述があったと考えるべきである。次節で述べるように、李舟の『能大師傳』は、洪州宗が中心となって編纂した燈史である『寶林傳』（801年）の「慧能章」のベースとなったと考えられるが、編纂の経緯が以上のようなものであったとすれば、これは、むしろ當然の流れであったと言えるのである。

#### 四 燈史の「慧能章」の源流としての『能大師傳』

上記のように『能大師傳』で創始されたと考えられる壬申年の弘忍入滅は、次の引用に見るように、後世の燈史である『寶林傳』（801年）や『祖堂集』（952年）に受け継がれている（もっとも『寶林傳』に據ったはずの『傳燈錄』は「上元二年」とするが、これは後で論ずるように、編者の道原が改変したものと見做すべきである）。

「寶林傳云。……弘忍。高宗二十四年二月二十六日壬申。至代宗諡號大滿禪師法雨之塔。」（『寶林傳』「弘忍章」）<sup>23</sup>



「大師付法後。高宗在位二十四年壬申之歲二月十六日滅度。春秋七十四。代宗諡號大滿禪師法雨之塔。自上元壬申歲遷化。迄今唐保大十年壬子歲。得二百八十年矣」(『祖堂集』「弘忍章」)<sup>24</sup>

更に、上記の推定によって『能大師傳』が初めて採用したと見られる隱遁期間を四年間とする説も、次のように『祖堂集』に受け継がれている(『寶林傳』は不明、『傳燈錄』は、その期間を明示せず)。

「後隱四會懷集之間。首尾四年。」(『祖堂集』「慧能章」)<sup>25</sup>

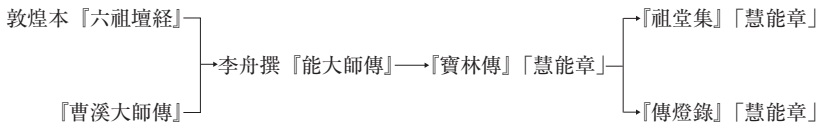
つまり、李舟の『能大師傳』の新説は後世の燈史にそのまま取り込まれているのであるが、『祖堂集』や『傳燈錄』の「慧能章」が基づいたと考えられるのが『寶林傳』の「慧能章」である。これは古くから想定されていたことであるが<sup>26</sup>、椎名宏雄氏の「『寶林傳』逸文の研究」によって部分的に裏づけられた。即ち、氏は、自らが發見した『寶林傳』の逸文を示しつつ、例えば次のように論じている。

「⑤は、六祖が唐朝から迎請の敕文とともに、従来は『曹溪大師傳』と『祖堂集』のみに存するところから、後者は前者を承けるものとみなされていた。しかるに、⑤の出現により、これらの三者を對照してみると、次のとおりとなる。……左の對照文により、記事は明らかに『曹溪大師傳』→『寶林傳』→『祖堂集』という影響關係が判明する。この關係は、また、六祖傳の隨處についてみられる傾向でもある。」<sup>27</sup>

「④は、『祖堂集』以後の資料において、六祖が新州の國恩寺を修復し、そこにおける說法語句とされるものの一部分である。『祖堂集』とのみ、字句が完全に一致する。」<sup>28</sup>

ただ、上の敘述からその一端が知られ、また、下に示す《圖表》によって明らかになるように、『祖堂集』と『傳燈錄』の間には非常に多くの内容上の出入りがあるため、『傳燈錄』が先行する『祖堂集』に直接に據ったのではなく（實際、『祖堂集』の存在はあまり知られていなかったようである）、『祖堂集』と『傳燈錄』の両者がそれぞれ別個に『寶林傳』に基づいて慧能の傳記を綴ったと考えるべきである。

つまり、慧能の伝記については、次のような依據關係が考えられるのである。



上記のような各種「慧能傳」の相互關係が明らかになると、それらを比較することによって、現存しない李舟撰『能大師傳』や『寶林傳』「慧能章」の構成や内容について或る程度の推定を行うことが可能となる。次に、この面から李舟撰『能大師傳』の内容を考えてみよう。

## 五 各種「慧能傳」との比較による『能大師傳』の内容の推定

各種「慧能傳」の構成要素については、様々な区分と理解が可能と思われるが、ここでは便宜的に前掲の『慧能研究—慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』のものを採用することとしたい。そして、それぞれの構成要素について、敦煌本『六祖壇經』、『曹溪大師傳』、李舟撰『能大師傳』、『寶林傳』、『祖堂集』、『傳燈錄』の各「慧能傳」に該當する記載があるかどうかを示したうえで、他の「慧能傳」との關係から、李舟撰『能大師傳』、並びに『寶林傳』の内容を推定してみたのが次の一覽表である。なお、こ

の一覧表における各表記の意味は以下の通りである。

1. 「○」は、その存在が確認されるもの。但し、現存しない『寶林傳』『慧能章』と『能大師傳』については以下の基準に従った。
  - a. 『寶林傳』の「○」は、椎名宏雄氏の「『寶林傳』逸文の研究」に基づく。括弧内の○付き番號は同論文のものをそのまま用いた。
  - b. 『能大師傳』の「○」は、姚寬の『西溪叢語』の言及によって存在が確認できるもので、a～dは、それぞれ先に引用した『西溪叢語』引用文の下線部に對應する。
2. 「×」は、その非存在が確認されるもの。
3. 「△」は、『寶林傳』『慧能章』と『能大師傳』の現存しない部分について、それが存在したと推定されるもの。但し、その判断は、以下の基準に従った。
  - a. 『能大師傳』の「△」は、それに基づいた『寶林傳』、『祖堂集』、『傳燈錄』の中のいくつかに存在が確認されるもの。
  - b. 『寶林傳』の「△」は、それに基づいた『祖堂集』か『傳燈錄』のいずれか、あるいはその雙方に存在が確認されるもの。
4. 「○」と「△」について補足説明が必要と判断される場合は、( )を附して補った。
5. 『能大師傳』と『寶林傳』の空欄は、判断が不可能で存缺不明であることを示す。特に「不明」と明記したものうち、「不明1」と「不明3」は、李舟が西堂智藏の門下であったことを考えれば、神會との機縁を除き、南嶽懷讓との関係を何らかの形で示していた可能性が考えられるが、それを確定する方法がない。また、「不明2」は、『能大師傳』の目的の一つが『曹溪大師傳』の年代論の混亂を收拾するところにあったとすれば、儀鳳元年の慧能の出世から先天二年の遷化に至る布教期間を36年と正しく数えていたはずであるが、その期間を「三十六年」と明示してはいなかった可能性が強い。もし明示していれば、それに基づい

た『寶林傳』が、その傳記と矛盾する敦煌本『六祖壇經』などの40年布教説を採用することはなかったと考えられるからである。

## 6. その他

- a. 『能大師傳』の下線部は、本拙稿の推定に據って、ほぼ間違いなくそのようになっていたと考えられる事跡を示す。
- b. 「南方に隱遁」<sup>23</sup>について、敦煌本『六祖壇經』の隱遁期間は、本文中に「汝去努力。將法向南。三年勿弘此法。難去以後。弘化善誘。」<sup>29</sup>と述べられていることによって「三年」と認められるが、字形の類似による寫誤で、本來は「五年」であったと考えるべきである。上述のように、敦煌本『六祖壇經』の成立から『曹溪大師傳』の成立までは僅かに10年ほどに過ぎなかったと考えられるから、その間に何らかの理由によって隱遁期間が「三年」が「五年」に變更されたとは考えにくいからである。

	敦煌本 六祖壇經	曹溪大師傳	能大師傳	寶林傳	祖堂集	傳燈錄
2. 寶林寺の由來	×	○	△	○ (45)	×	×
3. 出生	×	×			×	×
4. 諱・俗姓	○	○	△	△	○	○
5. 本貫	○	×	△	△	○	○
6. 生國	○	○	△	△	○	○
7. 父母	○ (幼少にして父を失う)	○ (3歳で父を失う)	△	○ (父の名は行瑫) (42)	○ (早くに父の行瑫を失う)	○ (3歳で父の行瑫を失う)
8. 性格・力量	×	○			×	×
9. 柴を賣る・『金剛經』を聞く	○	×	△	△	○ (柴を買い、『金剛經』を誦した人を安道誠とする)	○
10. 遊行	×	○	△	△	×	○

11. 劉志略との交友	×	○ (30歳)	△ (年齢を明示せず?)	○ (31歳) (43)	×	○ (年齢を明示せず)
12. 無盡藏尼との関係	×	○	△	○ (43)	×	○
13. 寶林寺に居住す	×	○ (33歳)	△ (年齢を明示せず?)	○ (年齢を明示せず) (46/47)	×	○ (年齢を明示せず)
14. 遠禪師に参ず	×	○	△	△	×	○
△	○ (客の安道誠)	○ (客と智遠)				
16. 弘忍を訪問	○	○ (34歳)	△ (年齢を明示せず?)	△ (32歳?)	○ (32歳)	○ (32歳)
17. 弘忍との初相見・佛性問答	○	○	△	△	○	○
18-1. 碓坊生活	○ (8箇餘月)	○ (8箇月)	△ (8箇月?)	△ (8箇餘月?)	○ (8箇餘月)	○ (8月)
18-2. (慧能の)悟道の偈	○ (二首)	×	△	△ (一首?)	○ (一首)	○ (一首)
19. 大法相續	○	○	○ (a)	○ (48)	○	○
20. 傳衣・五祖の傳法偈	○	○	△	△	○	○
21-1. 九江驛に送らる	○	○	△	△	○	○
21-2. 弘忍の入滅	×	○ (付法後3日)	○ (壬申、付法後間もなく) (b)	○ (高宗二十四年壬申) (44/49)	○ (付法後3年、高宗二十四年壬申)	○ (付法後4年、上元二年乙亥)
22. 恵明との機縁	○ (提不起なし)	○ (提不起なし)	○ (提不起なし) (d)	△ (提不起あり?)	○ (提不起あり)	○ (提不起あり)
23. 南方に隱遁	○ (3年間、「三年」は「五年」の寫誤であろう)	○ (5年間)	○ (4年間?) (c)	△ (4年間?)	○ (4年間)	○ (期間を明示せず)
24. 印宗に遇う・涅槃經聽講	×	○	△	△	○	○
25. 風幡の問答	×	○	△	△	○	○

26. 得法の表明	×	○	△	△	×	○
27. 剃髪・髪塔 建立	×	○（儀鳳元 年、40歳）	△（儀鳳元 年？）	○（ <sup>48</sup> ）	○（儀鳳元 年）	○（儀鳳元 年）
28. 受戒・法性 寺戒壇の由 來と（求那 跋摩によ る）懸記	×	○	△	△	○	○
29. 神會との機 縁	○	○	不明 1	○（神會章） （ <sup>76</sup> ）		
○（神會章）	○（神會章）					
30-1. 曹溪に歸 る	○	○（儀鳳二 年）	△（儀鳳二 年？）	△（儀鳳二 年？）	○（儀鳳二 年）	○（儀鳳二 年）
30-2. 曹溪での 化道	○（40餘年 間）	○（36年間）	不明 2	△（40年 間？）	○（40年間）	○（40年間）
31. 高宗（中宗） の詔	×	○（神龍元 年、高宗、 詳細）	△（神龍元 年？、中宗？、 詳細？）	○（神龍元 年？、中宗？、 詳細？）（ <sup>50</sup> ） / （ <sup>51</sup> ）	○（神龍元 年、中宗、 詳細）	○（神龍元 年、中宗、 簡略）
32. 法泉寺の救 額・國恩寺 の敕造	×	○（神龍三 年）	△	○（神龍三 年）（ <sup>52</sup> / <sup>54</sup> ）	○（神龍元 年）	○（神龍三 年）
33. 國恩寺の修 復・靈振を 推舉	×	○（延和元 年）			×	×
34. 龕塔を造る	○（先天元 年）	○（景雲二 年）	△（先天元 年？）	△（先天元 年？）	○（先天元 年）	○（先天元 年）
35. 疾病	×	○（先天二 年）			×	×
36-1. 遺誡	○（「三科 法門」「眞 假動靜偈」 等）	×	△	△	○（衣を傳 えないこと、 新州に行っ て生きては 戻らない等 と告げる）	○（衣を傳 えないこと、 新州に行っ て生きては 戻らない等 と告げる）
36-2. 頭を取り にくる豫 言をする	×	×	△	○（ <sup>58</sup> ）	○（慧寂章）	○

36-3. 懸記	○ (20年懸記) (神會)	○ (70年懸記) (出家・在家の東來の二菩薩)	△ (70年懸記?) (出家・在家の東來の二菩薩?)	△ (70年懸記?) (出家・在家の東來の二菩薩?)	○ (70年懸記) (出家・在家の東來の二菩薩)	○ (70年懸記) (出家・在家の東來の二菩薩)
37. 傳法偈	○ (三首)	×	△	△	○ (一首、詳細)	○ (一首、簡略)
38-1. 遷化・歿年等	○ (先天二年、76歳)	○ (先天二年壬子、76歳)	△ (先天二年癸丑、76歳?)	○ (先天二年癸丑)(55)	○ (先天二年癸丑、76歳)	○ (先天二年癸丑、76歳)
38-2. 慧能の遷化から當該文獻の成立までの年數	×	○ (先天二年壬子から建中二年までの71年)	△	△	○ (先天二年癸丑から保大十年壬子までの239年)	○ (先天二年癸丑から景德元年甲辰までの292年)
39. 奇瑞	○ (簡略)	○ (詳細)	△	△	○ (簡略)	○ (簡略)
40. 遺體を膠漆す	×	○	△	△	×	○
41. 遷神・入龕	○	○	△	△	×	○
42. 頭を取りにくる	×	○ (開元二十七年)	△	○ (開元十一年)(59/60)	○ (開元十一年)	○ (開元十年)
43. 衣鉢を守る	×	○ (行滔)	△	○ (袈裟の説明あり)(57)	×	○ (袈裟の説明あり)(別に令艸章あり)
44. 建碑	○ (韶州刺史韋璩)	○ (殿中侍御史韋璩)	△	○ (前韶州刺史兼御史兼御史中丞韋璩)(56)	×	○ (韶州刺史韋璩)
45. 碑の磨却・武平一の記事	×	○ (開元七年、武平一)			×	×
46. 門人(懷讓・行思の有無)	×	×	不明3	○ (南嶽章、62~69) / 石頭章、77~78)	○ (南嶽章/青原章)	○ (南嶽章/青原章)
47. 傳衣奉納・供養	×	○ (上元二年)	△	△	×	○ (上元元年)

48. 送香	×	○（乾元三年）			×	×
49. 傳衣返却とその敕書	×	○（永泰元年）	△	△	×	○（永泰元年）
50. 靈瑞	○（簡略）	○（詳細）			×	○（盗まれた傳衣が常に戻ってきた）
51. 諡號	×	×	×（當該文獻成立後に下賜）	×（當該文獻成立後に下賜）	○（中宗、大鑒）	○（憲宗、大鑒）
52. 後代の雜錄	×	×		○（貞元二年の神異） (61)	×	○（宋の太宗の修造）
53. その他				○（法泉寺に師子國王の五色蓮花數株あり） (53)	○（淨修禪師の讚）	

この一覽表によって、李舟の『能大師傳』が敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』を綜合するとともに、その矛盾を止揚しようとしたものであり、また、『寶林傳』に取り込まれることで、後世の燈史の基礎となったとする先に示した私見が非常に説得的なものであることが知られよう。

思うに、『曹溪大師傳』が九世紀の初めに入唐した最澄（767-822、804-805入唐）が齎した一本以外にその存在が全く知られないのは、全てにおいて李舟撰『能大師傳』によって基本的に乗り超えられたために、その存在意義を失い、中國では間もなく散佚したためであろう。また、李舟の『能大師傳』の散佚も、恐らくは、その説がほぼそのまま『寶林傳』に取り込まれたため、その存在意義が失われたためであろう。『曹溪大師傳』は幸運にも最澄によって日本に將來されたために今日まで伝えられたが、李舟撰『能大師傳』は、『西溪叢語』にそれへの言及を留めるだけで完全に失われてしまった。しかし、実際には、『曹溪大師傳』に勝るとも劣らぬ極



めて重要な歴史的な意義を有したと見るべきである。

なお、『能大師傳』の影響は燈史には限られなかったようである。本書に據れば、弘忍歿後4年にして慧能が出世したことになるが、敦煌本『六祖壇經』等では弘忍の入滅と慧能への傳法とは關聯づけられていない。ところが、大乘寺本『六祖壇經』や興聖寺本『六祖壇經』では、

「五祖言。如是如是。但依此見。已後佛法大行矣。汝去後一年。吾即前逝。  
五祖言。汝今好去。努力。南中五年。佛法難起。他後行化。善誘迷人。若  
得心開。與吾無別。辭違已了。徑發向南。」(大乘寺本)<sup>30</sup>

「五祖言。如是如是。但依此見。已後佛法大行矣。汝去後一年。吾即前逝。  
五祖言。汝今好去。努力。向南五年勿說佛法。難起已後。行化善誘迷人。  
若得心開。與吾無別。辭違已了。便發向南。」(興聖寺本)<sup>31</sup>

などと兩者を結びつけ、傳法の一年後に入滅したとされている。大乘寺本『六祖壇經』や興聖寺本『六祖壇經』は、5年の隱遁を認めるから、弘忍の入滅から慧能の出世までは恰も4年となる。これは、直接か間接かは不明であるが、『能大師傳』の影響を蒙ったものと見做すべきであろう。

## 六 後世の燈史に見る『能大師傳』の説への改換と混亂

上に論じたように、李舟撰『能大師傳』は、先行する敦煌本『六祖壇經』と『曹溪大師傳』に基づきつつ、それらに散見された矛盾を解消した極めて優れた慧能傳であった。そのため、後世の燈史に大きな影響を与えたのであったが、それらの燈史の編輯者が李舟の工夫の意味を十分に認識していたわけではなかったようである。というのは、その編輯に際して、『能大師傳』が提出した年代論と矛盾する新たな主張を加えることによって、慧能の年代論に新たな混亂を生じているからである。最後にこの問題につ

いて考えておこう。

先ず注目すべきは、慧能が弘忍に参問した時の年齢と嶺南における布教期間について、李舟撰『能大師傳』とは矛盾する説が『寶林傳』に取り込まれ、それが『祖堂集』や『傳燈錄』に受け継がれているということである。それは、例えば『祖堂集』で言えば、次の記載である。

「時有盧行者。年三十二。從嶺南來。禮觀大師」(「弘忍章」)<sup>32</sup>

「爾時大師住世說法四十年。」(「慧能章」)<sup>33</sup>

この由來は、恐らく、敦煌本『六祖壇經』に「大師住漕溪山韶廣二州。行化四十餘年」<sup>34</sup>とあることから、慧能の嶺南における布教を40年間とし、慧能が歿した時に76歳であったことから36歳での出世を導き、更に李舟撰『能大師傳』に始まる4年間隱遁説に基づいて、32歳での参問と得法を導出したのであろう。しかし、儀鳳元年(676)の出世であれば、慧能が減した先天二年(713)年までは、37年間、あるいは38年間であって40年間にはならない。これは、李舟撰『能大師傳』とは全く相い容れない説であって、慧能傳に混亂をもたらす以外の何ものでもなかったと言わねばならない。

『祖堂集』では、これに加えて、李舟撰『能大師傳』の年代論にも、敦煌本『六祖壇經』に基づく年齢にも矛盾する説が新たに書き込まれている。それは、「弘忍章」において、慧能に傳法偈を授けた後、南方に去らせるに当たって隱遁を勧め、

「吾三年方入滅度。汝且莫行化。當損於汝。」<sup>35</sup>

と語ったというものである。これは慧能が得法した3年後に弘忍が入滅したとするものであるが、他には全く見えないものである。『祖堂集』では、

慧能の隱遁期間が4年間とされているから、これによれば、儀鳳元年(676)の初めに慧能が出世する前の4年間、つまり、咸亨三年(671)の末、あるいは咸亨四年(672)の初めから上元二年(675)の末までの4年間が隱遁期間で、弘忍の入滅は上元元年(674)となる道理であるが、一方で『祖堂集』では、李舟撰『能大師傳』を承けて、弘忍の滅度を「高宗二十四年壬申」、つまり、咸亨三年(672)とするため、完全な矛盾が生じている。

思うに、この説は、弘忍の歿年の次の年に慧能の出世を置くことで東山法門の指導者の地位が弘忍から慧能へと移ったことにしようとする配慮によるもので、慧能が4年間隱遁したのであれば、その4年目の歳に出世したと見て、その前年に弘忍が没したことにしようとしたものであろう。もしそうであれば、これは弘忍が入滅した上元二年(675)の翌年の儀鳳元年に慧能が印宗に見出されて出世したことにされ、更に、それが事実であることを證明するものとして『瘞髮塔記』が偽撰されたのと同じ發想に基づくものであると言える。

この外にも『祖堂集』「弘忍章」には、大庾嶺で慧能が明上座に語った内容として、弘忍が付法に際して、

「十有餘年勿弘吾教。當有難起。過此已後。善誘迷人。」<sup>36</sup>

と語ったとされているが、これに従えば、慧能の隱遁期間は10年以上であったこととなり、先に引いた「後隱四會懷集之間。首尾四年」という『祖堂集』自體の記述と矛盾することになってしまう。この説の由來を尋ねると、神會の依頼によって王維が撰述した慧能の碑文、王維撰『六祖能禪師碑銘』に、

「禪師遂懷寶迷邦。銷聲異域。衆生爲淨土。雜居止於編人。世事是度門。混農商於勞侶。如此積十六載。」<sup>37</sup>

と見え、また、『歷代法寶記』や宗密の『圓覺經大疏鈔』に、

「後惠能恐畏人識。常隱在山林。或在新州。或在韶州。十七年在俗。亦不說法」(『歷代法寶記』)<sup>38</sup>

「在始興南海二郡。得來十六年竟未開法。」(『圓覺經大疏鈔』卷第三之下の「慧能第六」の割注)<sup>39</sup>

と言うのと一致するから(他が「十六載」「十六年」とするのに對して『歷代法寶記』が「十七年」とするのは、單に數え方の相違と見てよい)、敦煌本『六祖壇經』や『曹溪大師傳』が隱遁期間を5年とし、また、李舟がそれを4年に改める前の古い傳承(荷澤神會が唱えた説)に據るものであることが知られる。このように、『祖堂集』では、『寶林傳』を介して李舟撰『能大師傳』の説を繼承しながらも、それとは矛盾する説が次々に書き込まれていったことが知られるのである。

一方、『傳燈錄』においても、獨自の改變が行われている。それは李舟が無理やり改めた弘忍の歿年をもとに戻そうとする書き換えである。前述のように、李舟は、『能大師傳』を編集するに当たって、『曹溪大師傳』をベースとしつつ、その年代論上の矛盾を解消せんと努めた。しかし、一方で、弘忍の入滅を慧能への付法の直後とする『曹溪大師傳』の説はそのまま採用したため、自らが導き出した慧能の得法の時期(672年)と舊來の弘忍の入滅の時期(675年)の矛盾を解消するため、後者を前者に合わせるという強引な手段を採った。『傳燈錄』で行われた改變の一つは、この前例のない新奇な説を從來の通説に戻すことであった。『寶林傳』や『祖堂集』は、前述のごとく、李舟撰『能大師傳』に従って、弘忍の入滅を咸亨三年(672)とするが、『傳燈錄』のみは、次のように上元二年(675)に改めている。

「忍大師既付衣法。復經四載。至上元二年<sup>乙亥歲乃唐高宗時也。至肅宗時復有上元年號。其二年歲在辛丑也</sup>忽告衆曰。吾今事畢時可行矣。即入室安坐而逝。壽七十有四。建塔於黃梅之東山。代宗皇帝諡大滿禪師法雨之塔。自大師滅度至皇宋景德元年甲辰。凡三百三十年。」<sup>40</sup>

先に述べたように、上元二年弘忍入滅説は荷澤宗では古くからの定説であった。これによって、弘忍の入滅時期は、再び慧能が出世した儀鳳元年の前年に置かれることとなったわけであるが、一方で『傳燈錄』では、慧能への傳法の4年後に弘忍が入滅したとして、

「忍大師既付衣法。復經四載。至上元二年<sup>乙亥歲乃唐高宗時也。至肅宗時復有上元年號。其二年歲在辛丑也</sup>忽告衆曰。吾今事畢時可行矣。即入室安坐而逝。壽七十有四。」<sup>41</sup>

という記述が見えるため、慧能への傳法は、上元二年の四年前の咸亨二年(671)となる。生歿年からすれば、この時、慧能は34歳であったはずであるが、『傳燈錄』では、弘忍に参問した時の年齢を32歳であったと明示するから、この點で再び矛盾が生じてしまっている。

『傳燈錄』が、慧能への傳法の4年後に入滅したとする理由は明らかではないが、恐らくは、李舟撰『能大師傳』の4年間隱遁説に従って、慧能の隱遁期間の最後の年に弘忍の入滅を置こうとしたものか、あるいは、敦煌本『六祖壇經』や『曹溪大師傳』の説く5年間隱遁説を採用した上で、その前年に弘忍の入滅を置こうとしたかのいずれかであろう。

## むすび

李舟(740-787)撰『能大師傳』は、『曹溪大師傳』と敦煌本『六祖壇經』をベースとして、各文獻内の矛盾、兩者間の矛盾等を解消し、荷澤宗の祖師に止まらぬ、「禪宗の第六祖」としての傳記を確立しようとして撰述されたもので、そこには、李舟が晩年に親交を結んだ西堂智藏の意向があっ

たとえられる。そのため、後に、『能大師傳』は、『寶林傳』の「慧能傳」に取り込まれ、『祖堂集』や『傳燈錄』などの後世の燈史に多大な影響を与えたのである。しかし、その説の大部分がそのまま『寶林傳』に取り込まれたため、李舟撰『能大師傳』は、その独自の存在意義を失い、やがて歴史の静寂に忘れ去れてしまったのであるが、「六祖慧能」の傳記が確立される上で、それが果たした歴史的意義は極めて大きかったのである。

特に注意すべきは、本拙稿で示したように、李舟撰『能大師傳』の存在を考慮に入れることで各種「慧能傳」に見られる年代論の混亂のかなりの部分をうまく説明できるということであって、「六祖慧能」の傳記が形成される過程を探る上で不可欠の資料だと言えるのである。

#### 【注】

- 1 駒澤大學禪宗史研究會『慧能研究—慧能の傳記と資料に関する基礎的研究』（大修館書店、1978年）。
- 2 石井修道「洪州宗における西堂智藏の位置について」（『印度學佛教學研究』27-1、1978年）や椎名宏雄「『寶林傳』逸文の研究」（『駒澤大學佛教學部論集』11、1980年）がわずかに論及する程度である。
- 3 その経緯については、本年6月に禪文化研究所から刊行された拙著『中國禪思想史』の第三章にその概要が載せられており、また、本年度の印度學佛教學會でも一部論及する豫定である。
- 4 王雲五主編『西溪叢語』（叢書集成簡編、臺灣商務印書館、1966年）19頁。
- 5 大正藏47、747a25-26。
- 6 大正藏51、223a9-25。
- 7 「弘忍章」、大正藏51、223a25-26。
- 8 「弘忍章」、大正藏51、223a26-27。
- 9 「弘忍章」、大正藏51、223a28-29。
- 10 「蒙山道明章」、大正藏51、232a06-08。
- 11 印順著・伊吹敦譯『中國禪宗史—禪思想の誕生』（山喜房佛書林、1997年）228頁を参照。
- 12 前掲『慧能研究—慧能の傳記と資料に関する基礎的研究』36頁。
- 13 伊吹敦「『曹溪大師傳』の成立をめぐる」（『東洋の思想と宗教』15、1998年）。

ただし、この論文では、弘忍に参じた年と南歸した年を同年中と見做して年代論を説明したが、碓を踏む八箇月に寶林寺から東山に行くまでの時間、東山から南歸するまでの時間を加えると、作者は四會・懷集に至ったのを次の年と見做した可能性が強いと判断して修正した。

- 14 前掲『曹溪大師傳』の成立をめぐる 98-101頁を参照。
- 15 柳田聖山『初期の禪史Ⅱ』（筑摩書房、1976年）92-93頁。現行本『師資血脉傳』の文章そのものは「至上元年。大師春秋七十有四。其年二月十一日。奄然坐化」（楊曾文『神會和尚禪話錄』中華書局、1996年、108頁）となっているが、『歴代法寶記』から見て、これは「上元」の下に「二」の字を脱したものとするべきである。
- 16 陳冠明「李舟行年考」（『杜甫研究學刊』1995年第3期、1995年）。
- 17 伊吹敦「『六祖壇經』の成立に關する新見解—敦煌本『六祖壇經』に見る三階教の影響とその意味」（『國際禪研究プロジェクト、2020年度第2回研究会（2020年12月12日）発表資料。本誌に掲載）。
- 18 前掲『慧能研究—慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』52頁。
- 19 これについては、前掲の『中國禪思想史』第三章を参照されたい。また、本年度の印度學佛教學會でも発表する豫定である。
- 20 陳尚君輯校『全唐文補編』（中華書局、2005年）中冊、952頁。
- 21 『全唐文』731。
- 22 石井修道「譯注『裴休拾遺問』」（『駒澤大學禪研究所年報』3、1992年）28頁。
- 23 前掲『寶林傳』逸文の研究 246頁。
- 24 孫昌武・衣川賢次・西口芳男點校『祖堂集』（中國佛教典籍選刊、中華書局、2007年）121頁。
- 25 前掲『祖堂集』125頁。
- 26 前掲『中國禪宗史—禪思想の誕生』341頁。
- 27 前掲『寶林傳』逸文の研究 251-252頁。
- 28 前掲『寶林傳』逸文の研究 252頁。
- 29 楊曾文『敦煌新本 六祖壇經』（上海古籍出版社、1993年）13頁。ただし、楊氏のテキストの「難起」を「難去」に改めた。
- 30 前掲『慧能研究—慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』287-288頁。
- 31 前掲『慧能研究—慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』287-288頁。ただし、文中の「難起」は「難去」に改められるべきである。
- 32 前掲『祖堂集』117頁。

- 33 前掲『祖堂集』129頁。
- 34 前掲『敦煌新本 六祖壇經』46頁。
- 35 前掲『祖堂集』119頁。
- 36 前掲『祖堂集』120頁。
- 37 『全唐文』327。
- 38 前掲『初期の禪史Ⅱ』123頁。
- 39 續藏1-14-3、277a。ただし、原文の「二部」を「二郡」に改めた。
- 40 大正藏51、223a28-b5。
- 41 大正藏51、223a28-b2。